

## 暗い [ɫ] から [ʊ] への母音化—RP<sup>1</sup> のコックニー的変容\*

田 中 美和子\*

### The Vocalization of Dark [ɫ] to [ʊ]—a Cockney-like Modification in Received Pronunciation

Miwako Tanaka\*

#### Abstract

In most forms of English, there is a distinction between “light [l]” and “dark [ɫ]”, as in “leaf” and “feel”. Accordingly, a narrow transcription of “leaf” would be [lif], and that of “feel” [fiɫ]. Also claims have been made that the vocalization of dark [ɫ] to [ʊ], for example “feel” [fiʊ], which is originally one of the features of Cockney, has already become standard in Received Pronunciation (RP), over the course of this century. Cockney is a class dialect as well as a regional one, which is spread widely through the working class of London. “Estuary English” (London Regional RP), is an accent which shows RP modified toward Cockney, including this vocalization. This tends to be adopted by young people, wishing to avoid General RP because of its stigma of being “posh”.

#### キーワード

暗い [ɫ]、明るい [l]、母音化、コックニー、ロンドン地域RP

#### 0. はじめに

自然言語にはさまざまな変種が存在し、英語もその例外ではない。しかし、例えば某大学には「ネイティブ・イングリッシュ (Native English)」という科目があり、巷の英会話教室では「ネイティブライクな発音を身につけよう」などのスローガンを目にする。「ネイティブ・イングリッシュ」という科目の学習目標には「Native Englishか、それに近い英語表現が活用できるようになること」とある。しかし、ネイティブ・イングリッシュとは、そもそも「民族英語 (Ethnic English<sup>2</sup>)」や「獲得英語 (Acquired English<sup>3</sup>)」と並ぶ1つの大きなカテゴリーを指すのであり、1種類の言語ではないのである。

サウジアラビアや日本で英語を学ぶ者は、ベルリッツなどの語学学校で、1つの英語ではなく2つの英語に出会うと言われている<sup>4</sup>。すなわち、イギリス英語とアメリカ英語の

---

\*たなか みわこ：大阪国際大学法政経・経営情報学部非常勤講師〈2006.12.21受理〉

ことであるが、これらは発音や語形変化のみならず、時には語彙まで異なっている。しかし、この「2つの英語」という表現すら不十分である。なぜなら、英語は英米だけではなく他の多くの国々の母語や公用語であるし、さらに英米語といっても、南部英語からコックニー<sup>5</sup>まで、さまざまな特徴の束からなる変種に分類されるからである。

英語のアルファベットは26個であるが、音声単位としてはイギリス英語とアメリカ英語の違いを考慮すると約40個が存在すると言われている。その中で、共に流音 (liquid) と呼ばれる /l/ と /r/ は、どちらも日本語には存在しない子音であるために、日本語を母語とする学習者が、例えば grass /græs/ と glass /glæs/ の弁別が苦手であることは、よく知られている<sup>6</sup>。

本稿は、世界に拡散する英語の現状分析と、流音 /l/ と軟口蓋化 (velarization) による異音、また母音化 (vocalization) による異音とが、何を源に、どのように広がっていったのかを、イギリス英語とアメリカ英語の両方の観点から精査し、流音の母音化のメカニズムとその広がりについての仮説をたてることを目的とする。まず第1章では、英語という言語が、イギリスやアメリカで、どのように広がっていったのかをつぶさにみていきたい。

## 1. 英語の諸背景

### 1.1. 英米と英語の広がり

約2000年前、ジュリアス・シーザーがブリテン島に上陸した頃は、今のイギリスに英語はその存在の片鱗すらも無かった。古英語最古の文献は、紀元7世紀末頃、すなわち今から1300年位前のものになる。英語の歴史は、通例、次のような3つの時期に分けられる。すなわち7世紀頃からの古英語、1100年頃からの中英語、1500年頃からの近代英語である。近代英語はさらに16-17世紀の初期近代英語と18-19世紀の後期近代英語に分けられる。そして、20世紀以降の英語は現代英語と呼ばれている。

20世紀初頭になると、戦争と植民地支配、そして貿易によって、イギリスは繁栄を極め、その結果、英語が、イギリスからインドやアフリカ諸国へ広がっていった。しかし、第二次世界大戦 (1939-45) 後、イギリスは次々とこれらの植民地を失う。これに伴って、英語も国際的な地位を失っていくと思われたが、実際は、インド<sup>7</sup> やケニア<sup>8</sup> など旧イギリス植民地においてさえ、公用語として英語が採用されている。

これには、次のような理由が考えられる。第一に、複数の言語を持つ他民族国家にとって、中立的な言葉として英語が理想的であること、第二に、イギリスの代わりにアメリカ合衆国が世界の経済の中心になり、アメリカの国語でもある英語が再び国際的な力を持つようになったことである。20世紀後半にも、英語を知らなければ不利になる世界が出現したのである。

現在、英語においては、さまざまな価値転換に伴って、「下位から上位へ」という下剋上の言語変化が見られるように思われる。以下では、ネイティブ・イングリッシュの大きな2つの流れであるイギリス英語とアメリカ英語の歴史を概観し、次に、学習対象としての「獲得英語 (Acquired English)」の趨勢をみていく。

## 1.2. ネイティブ・イングリッシュ：イギリス英語の場合

イギリスでも特に北アイルランド・スコットランド・ウェールズを除いたイングランドにおける、階級社会と階級英語の関係は、以下の図の通りである。イギリス英語において標準語とみなされる容認発音（以下、RP）は、上流階級と上層中流階級に属する僅か3%のイギリス人（イングランドの中では5%）の発音で、子供の頃からこれを用いる上流階級の話者が大部分を占め、後はパブリック・スクールやオックスフォード・ケンブリッジといった有名大学の卒業生らが使用するとされている。彼らはイギリス社会で高い地位と指導的立場にある層であり、RPは社会的威信のある英語発音とみなされている。

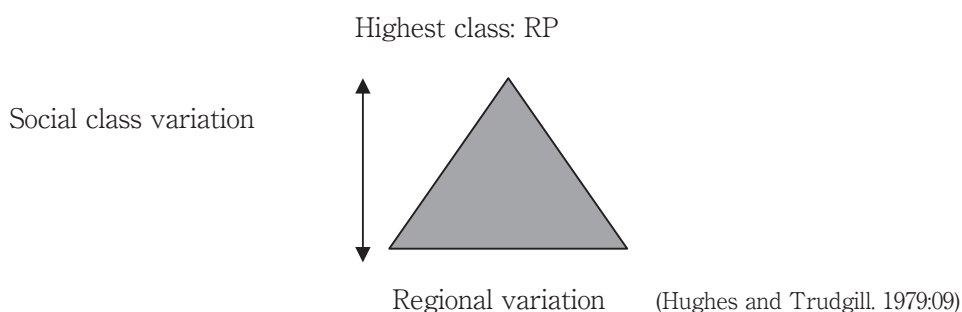


図1 イングランドの社会階級と地域英語の関係

「完璧な英語」であるはずのRPは、もともとロンドンとその周辺の地域英語を基調として作られた。1870年の教育条例によって、19世紀イギリスのパブリック・スクールは、中流階級が上流階級へ融合する場となり、教育を受ける者は出身階級を示す地域英語を修正してRPを習得したのである。当時のRPは、教養があることは示すが、出身階級や出身地域を特定させない言葉であるとされたのである。

RPを話さないイギリス人、労働者階級や中流階級に属し容認度の低い英語を話すイギリス人は、イギリス社会では圧倒的多数を占める。彼らが話す地域英語には多くの種類があり、容認度にも差がある。例えば、アイルランド英語、スコットランド英語などは容認度が高いが、リバプール英語、グラスゴー英語、そしてロンドンのCockneyはこれが低い。さらに、同一の地域英語の中にも容認度に差がある。例えば、Cockneyには、教育などによって訛りが和らいだ「訛りの軽いCockney (light Cockney)」と「訛りの強いCockney (deep Cockney)」がある。訛りの強いものほど容認度が低く、その逆に洗練されたものは洗練されただけ容認度が高くなる。そして、容認度が高い英語を話す人に対しては、教養や育ちの良さだけでなく、顔立ちの良さまでが連想されるという。

一方、三角形の頂点となるRPにも、幾つかのパラエティ<sup>9</sup>が認められる。たとえばWells (1982<sup>b</sup>)は、主流のMainstream RPと訛りが残るNear RPに分け、さらに前者を貴族などのU-RPと大人になってから身に付けたAdoptive RPの2つに再分割している。

イギリスでは、完璧な英語を話す人間はいないと考えられていた。RPを話すわずか3%の人たちの中にも、Wells (1982<sup>b</sup>)の言うMainstream RPとNear RPの人たちがいるのである。Near RPの話者が話す英語はそもそも完璧なRPではない。そして、

Mainstream RPはU-RPとAdoptive RPに分けられるが、U-RPを子供の頃から話す貴族たちは気取っていると思われまい、労働者階級のアクセントを真似ることがある。そして、Adoptive RPを話す人たちは、大人になってからRPを身につけたため、発音その他が通常不安定だと言われている。

では、そのようなイギリス英語を象徴するセリフを、映画から引用してみよう。次の例文(1)は、『マイ・フェア・レディ』(1964)<sup>10</sup>からである。

(1) ... Her [Eliza's] English is too good, he [Karpthy] said, which clearly indicates that she [Eliza] is foreign.

(Alan Jay Lerner. 1980: 163) (DVD 01:56:37)

言語学者ヒギンズ教授が、弟子のカパーシイがイライザの英語について下した診断を、引用しているセリフである。言語学者カパーシイ氏が「美しい英語を話す→外国人だ」と逆説的な推論をしており、そのことがヒギンズ教授を得意がらせている。なぜなら、イライザに「美しい英語」すなわち完璧なRPを教え込んだのは、ヒギンズ教授その人であったからだ。当時のイギリス社会で良い仕事に就くには、RPを身につける必要があった。『マイ・フェア・レディ』(1964)は、花売り娘イライザが、コックニーを矯正してRPを獲得し、三角形の底辺から頂点へと昇る話である。このようなイギリス英語の状況は、バーナード・ショーの戯曲『ピグマリオン (Pygmalion)』(1920)序文の「イギリス人が口を開けば、誰かがその人を軽蔑する (“it is impossible for an English man to open his mouth without making some other Englishman despise him.”)」という有名な警句が示す通りである。

また、Gimson (1980)はWells (1982<sup>b</sup>)と近い時期に、RPを次の3つのグループに分けている。第一に、一般的なBBC英語の典型的特徴を持つGeneral RP、そして第二に、年配の世代に伝統的に用いられるConservative RP、第三として、若い世代に用いられるAdvanced RPである。General RP以外は、年齢(世代)を基準にして、分割している。この三分法は、Gimson (1980)の修正版Cruttenden (2000)によって、General RPはそのままであるが、後の2つは「上流階級」のRefined RPと、各地域英語の影響で変容したRegional RPsという三分法へと変更された。時代と共に、RPも変化してきている。Cruttenden (2000)は、話者の年齢(世代)ではなく、話されるRPの特徴に注目したのである。

20世紀後半のイギリスでも、保守層に属する人々は、権力や出世と結びつくRPをこぞって獲得した。例えば、政治界では、保守党のエドワード・ヒース、マーガレット・サッチャー、ジョン・メイヤーらは、中流階級出身であるがRPを用いている。一方、労働党の政治家たちは、RPではなく、出身階級を示す地域英語を用いることによって、政治家としての信用を得ることに成功しているのである。このような事実から、イギリスの人々の間に、RPより地域英語を好む傾向が徐々に見られるようになったと言えるであろう。

世の中では、だんだん上流志向や上流趣味が疎んじられ、かつて軽蔑の対象であった労働者の文化や中流意識が逆に尊ばれるようになった。上流階級の英語RPは“Posh”と反感を持たれるようになり、オックスフォードやケンブリッジの学生の間にも中流階級の英語が使われるようになった。大学がRPを獲得する場所ではなくなり、RPの話者が逆に中流階級の英語に修正する場となってきた<sup>11</sup>。ルイス・ギルバート監督『アルフィー (Alfie)』(1966)には、ロンドン生まれの粋な男アルフィーの姿が描かれているが、彼は、中流階級のスラングのまざったCockneyを使って、次から次へと女性をくどきおとす。ロンドンに住みCockneyを話すことが「格好いい」と感じられていたことがわかる。

さて、Cockneyには、RPに象徴されるような威信はないが、イギリスの都市方言の中では、中より少し上に評価されている。そして、Cockneyの特徴も、ロンドン以外の土地でみられるようになってきた。都市の言葉は、通勤や通学をする人々によって、都市周辺の田舎へと伝わっていく。Cockneyも、当初、ロンドンから、テムズ川に沿ってエセックスや北ケントへと広がったと考えられて、その英語は「河口域英語 (Estuary English: EE)」と呼ばれ、RPとCockneyの中間に位置する発音と捉えられてきた。

Przedlacka (2001)によれば、河口域英語は、1980年代中頃から、ラジオやテレビで耳にする発音として注目され始め、90年代に入ってから河口域英語という呼び方と同時に「地域RPの1つのタイプ (a type of Regional RP)」とも呼ばれるようになり、低中流階級が用いると観察されている。そして、Cruttenden (2000:81)になると、河口域英語は、リバプールやマンチェスターなどの都市でも使われているので、「ロンドン地域RP (London Regional RP)」と呼ぶべきであると結論付けられた。そして、ロンドン地域RPは、RPをCockneyに近づけて変容させた英語と定義されるのである。

ロンドン地域RPは、特に若い世代の中で、いわゆるRPの持つ気取った印象や剥き出しの上流志向を避けたいと思う人々に、ファッションブルな言葉として受け入れられ、それぞれの地でその土地の地域RPに競合する形で用いられている。RPとは、もともとは話者の出身を特定しない言葉であったが、地域RPは、話者の出身を表すタイプのRPである。

このように、「容認度が低い」と侮蔑されてきた地域英語が、標準語であるRPに影響を与え、これを変容させる時代となった。そして、かつては地域英語の特徴だったものが、今ではRPの特徴として認められるものもある。同様に、これまで「下品でだらしがない」と思われてきたアメリカ英語が、逆に評判の良いイギリス英語に影響を与え、変容させることもある。アメリカ英語とイギリス英語の関係も、徐々に変わってきているといえるだろう。次節では、アメリカ英語がどのように広がっていったのかを概観してみよう。

### 1.3. ネイティブ・イングリッシュ：アメリカ英語の場合

イギリスのアメリカ入植は16世紀に遡る。1585年のウォルター・ローリーによる植民地化、1607年のヴァージニア州ジェームズタウンへの105人の入植、1620年メイフラワー号に乗り101人でやってきたピルグリム・ファーザーによる入植などがそれぞれである。この時に、イギリスからアメリカへと渡った英語は、16-17世紀初めイギリスの初期近代英語、中でもイギリス東部および南東部の地域英語が主体であった。従ってアメリカ英語には、

16～17世紀当時のイギリス英語の特徴が残っているのである。

アメリカの標準米語は、GA (General American: 一般アメリカ英語) と呼ばれ、東部と中西部全域の諸方言の総称で、RPとは対照的に、多数のアメリカ人が用いる中立的な言葉である<sup>12</sup>。Prator, C. and Robinett, B. (1985) の米語発音の教授用テキストにおいても、基準となるアメリカ英語は、「オハイオ州から中西部を通過して太平洋沿岸までの地域、すなわち方言の混合が最も進んでおり統一性のとれている区域に住み、言語的中心を構成している人々の言葉」とされており、これはKenyon and Knott (1953) が定義するGAに合致する。また、イギリスのBBC英語に相当するアメリカの「放送標準英語 (Network Standard)」は、BBC英語がRPを基調として作られたように、GAを基に作られている。GAは、現代南部イングランド英語に近いと言われている。

移民の国アメリカにはイギリスのような社会階級はなく、移動を好む国民性と交通・マスコミの発達のため、イギリス英語よりも均質だと言われている。GAに対立する地域英語は、リッチモンド、アトランタ、ニュー・オーリンズの南部英語 (Southern American English)、ニュー・イングランド、ニューヨークなどで話される北東英語 (several Northeastern accents) ぐらいである。そして、ボストン、ニューヨーク、リッチモンド、チャールストンなどの中心地は、他の地域よりもロンドンとの交流が緊密であったため、これらの地域では17世紀標準イギリス英語の特徴が多く保たれている。安井 (1987:259) は、アメリカ発音に現在見られる特徴は、すべて古いイギリス英語の名残と言ってもよい、とまで述べているが、その古い特徴の1つは、綴り字にrがあれば/r/と発音することである。ただし、黒人英語 (African American Vernacular English) やニューヨーク英語は、「rを発音しない変種 (r-less variety)」なので、注意する必要がある。

アメリカ人は、変種に対する寛容度が高い。そのため、マイノリティである黒人英語 (African American Vernacular English) の言い回しが、黒人でない人々の間において一般的に用いられることも珍しくない。また、政治家が地域英語で話しても、政治家としてのキャリアには、何の障害にもならない。アメリカの第35代大統領ジョン・F・ケネディはアイルランド英語、第39代ジミー・カーターは南部英語を話すことは有名であるし、最近では、カルフォルニア州知事になったアーノルド・シュワルツェネッガーはオーストラリア英語、第42代ビル・クリントンは南部英語、そして第43代大統領ジョージ・ブッシュはテキサス英語を話す。またブッシュ大統領の英文法の間違ひは有名で、インターネット上に彼の発言を専門に取上げるサイトがあり、彼の発言は「ブッシュイズム (Bushism)」と呼ばれている。しかし、どの政治家も、英語の問題から支持率が下がったという話は聞いたことが無い。アメリカ人は、政治家のスピーチの内容は気にするが、発音は気にしないのだと言う人もいる位である。

第二次世界大戦 (1939-45) より以前、世界では、イギリス英語が主流であった。しかし戦後になると、むしろアメリカ英語が脚光を浴びるようになる。国際的な通信網が発達し、アメリカは数々のハリウッド映画やTVドラマ、また学術雑誌や新聞、小説などを通して、アメリカの文化と英語を世界に供給するようになっていったからである。

2006年現在、日本で放映中のアメリカのTVドラマには、ブッシュ大統領夫人が自分も

見ていると発言して注目を集めた『デスパレートな妻たち (Desperate Housewives)』(2004) や『エイリアス (Alias)』(2002)、また再放送では『奥様は魔女 (Bewitched)』(1964-72) や『逃亡者 (The Fugitive)』(1963-66) など、多くの作品が放映されている。世界でも、例えば1983年末に、世界中で放送された『ダラス (Dallas)』(1978~91年放送) は大人気となり、アフリカの遊牧民族ツアレグ族が最終回の放送を見るために牧草地の移動を10日間も延期したと言われている。『ダラス』とは、油田を掘り当て大富豪となるテキサスのユーイング一族の物語で、アメリカでは最高視聴率53.3%を記録した357話にわたるドラマである。これらアメリカのTVドラマが、放映された世界の国々に与えた影響ははかりしれない。TVドラマだけではなく、『トムとジェリー (Tom and Jerry)』などのアニメも同様である。

このように、アメリカのドラマやアニメがイギリスのテレビでも見られるようになり、また他の媒体によってもイギリス人たちがアメリカ英語に触れる機会が増え、もともとイギリスからアメリカへと伝播した英語が、今度は逆に、アメリカからイギリスへ影響を及ぼす時代となった。言語は絶え間なく変化している。例えば、イギリスのロンドンに住むある人が黒人英語のフィルムを見ていたら、10歳の子供がフィラデルフィアのスラム街の新しい俗語を真似ているのに気付いて驚いたという話がある<sup>13</sup>。現実には、イギリス英語では、かつて衰退した仮定法がアメリカ英語の影響で復活しつつあると言われているし、工業技術、特にコンピューター関連の用語は、カルフォルニアからイギリスを含む全世界へと広がってきている。このような事実から、今は「イギリス英語のアメリカ英語化」に注目すべき時期だと言うことができるだろう<sup>14</sup>。

アメリカでは、今後、何らかの魅力を持つ地域英語の表現や音声の特徴が、より広い範囲に、階級の妨げなく広がる可能性がある。一例として、2章で扱う流音/l/が、暗い[h]から[ʊ]への母音化を起こす現象を、詳しく見ていきたい。

#### 1.4. 学習対象となる英語

外国語としての「獲得英語 (Acquired English)」は、伝統的に、容認度が高く威信のある標準的な言葉が好まれる。Wells (1982) は、学習対象として望ましい英語すなわち「標準発音 (Standard Accents)」について、以下のように説明している。

(2) Standard Accents: In England it is RP which enjoys this status, in the United States the range of accents known collectively as GenAm. A standard accent is the one which, at a given time and place, is generally considered correct: it is held up as a model of how one ought to speak, it is encouraged in the classroom, it is widely regarded as the most desirable accents for a person in a high-status profession to have. (Wells, 1982: 34)

この様に、高い社会的地位をもつ職業に就きたいなら、RPやGAを身に付けるべきだと、考えられてきた。しかし、階級社会を維持することや、中流以下の階級からの上流志向が

批判的に捉えられる時代となり、現在では、Wells (1982) のように単純には述べられない。Quirk, *et.al.* (1985:22) も、RPはもはや20世紀前半には威信を失って、他の地域英語に並ぶ1つの変種にすぎないと述べている。

シンガポールや日本や中国などアジアの国々では、中立的な「標準世界英語 (level global English)」が獲得対象言語として好ましいと思われるようになってきている<sup>15</sup>。標準世界英語を話すことにより、国際的にも優位性を持つ英語の力を享受することができ、それで十分なのである。これも、縦のヒエラルキーが徐々に横並びに変わる動きの1つであると言える。

実際、有名人の英語をみても、RPに、もう19世紀ほどの威信はないことがわかる。イギリスでは、貴族の称号を持つロック歌手ミック・ジャガー<sup>16</sup>は、中流階級出身であるのに下層階級 (労働者) の英語コックニーを好んで用いているし、またサッカー選手デビッド・ベッカムも、マスコミに出身階級を示すコックニーを用いて登場する。1.3節で述べたアルフィーは、マイケル・ケイン (Maicael Caine) というイギリス人俳優が演じているのだが、彼はロンドン下町出身でコックニーは母語である。インタビューにもコックニーで堂々と答えているが、「労働者階級出身だから同じ階級の役は演じやすいでしょう」とか、「コックニー訛りの役は簡単でしょう」といったコメントは差別的で不快だと言っている。ケインは、コックニー訛りにもいろいろあるのだし、例えば黒人はダンスが上手だというけれど僕の友人は踊れないよ、と続けている。彼の友人とは、名優シドニー・ポワチエ (Sydney Poitier) とクインシー・ジョーンズ (Quincy Jones) のことである。

つまり、イギリスには、今でも階級社会的な発想は一般に残っているのである。ただし、19世紀には、公の場所で、このように堂々とコックニーが用いられることはなかったであろう。コックニーを初めとする変種も、そして民族英語も、以前に較べると、少しずつ価値が認められるようになってきたのである。

そして、このような価値観の転換に伴い、コックニーのいくつかの特徴が、次の2章で説明するように、今度は反対の極に位置するRPへと進出している。その中の1つが、タイトルにもある「暗い [ɫ] から母音 [ʊ] への母音化」である。では、この音変化の基調となる流音 /l/ とその実際の音となる [l], [ɫ], そして母音 [ʊ] について、コックニーとロンドン地域RP、そしてアメリカ英語でどのような音になると記述されているのかを中心に、順に見ていく事にする。

## 2. 流音 /l/ とその異音 [l], [ɫ], そして [ɫ] から [ʊ] への母音化について<sup>17</sup>

最初に、それぞれの音について確認しておこう。基本的には、/l/ のような子音は次の3基準によって分類される。第一に、声帯が振動するかどうか、第二には調音点、そして最後に調音法である。/l/ は有聲子音、調音点は歯茎、そして調音法は息を舌の両側に通過させる側音 (lateral) と呼ばれるものである。したがって、/l/ は、有聲歯茎側音と分類される。

有聲歯茎側音 /l/ は、基本的に、舌尖を歯茎の中央に接触させて閉鎖を形成し、舌の両側または片側を開いて呼気を流出させる。ただし、この /l/ は、実際の発音では「明るい



[l̥]と「暗い[l̥]」という2つの音になることが知られている。そして、時に「暗い[l̥]」はさらに母音化という音変化を起こす。次に、標準的な説明を図と共に (Huang, R. 1983 (1965)) から引用しておく。

There are two types of *l*-sounds in English—the clear *l* and the dark *l*. In both the tip of the tongue is placed against the teeth ridge. They differ from each other in the position of the rest of the tongue. For the clear *l*, which is used before vowels and the semi-vowel *j*, the front of the tongue is raised towards the hard palate. For the dark *l*, which is used finally and before consonants, the front is slightly lowered (see dotted line in the diagram), and the back is raised towards the soft palate.



図2 明るい [l̥] (実線) と暗い [l̥] (破線) (Huang, R. 1983 (1965))

「明るい [l̥]」とは、上歯茎に接している前舌面から中舌・後舌と下がり、前舌母音のような構えで発音される。一方、音声環境によって、[l̥]の異音として出現する「暗い[l̥]」は、舌尖は上歯茎の中央に接触させたままで、中舌は少し窪ませ、後舌を軟口蓋に向かって盛り上げさせ、スプーンのようなへこみを口腔内で形成し、暗い音色を帯びさせる。そして、「暗い[l̥]」の軟口蓋化がさらに進み、後舌が軟口蓋に向かってさらに盛り上げようとすると、舌尖が自然に上歯茎から離れ、音は完全に後舌母音 [ɫ] へと変化する。この音変化が「母音化 (vocalization)」と呼ばれるものである。

### 2.1. /l/の母音化の起源と広がり

Wells (1982<sup>a</sup>) や Jones (1909) によれば、/l/の母音化は、100年位前、すなわち19世紀のロンドンに端を発した Cockney の特徴であり、ロンドン英語すなわち Cockney にもともと帰属する比較的新しい音変化である。Wright (1981: 134) も当時、Cockney の/l/の母音化を始めて記述した作家として、バーナード・ショー (1980) をあげている。2.2節 (6) がその例である。

そして、この Cockney の/l/の母音化は、1980年初めには、既にRPに侵入しつつあったことが以下に記録されている。

(3) From its putative origins in the local accent of London and the surrounding counties, L Vocalization is now beginning to seep into RP. It seems likely that it will

become entirely standard in English over the course of the next century.

Wells (1982<sup>a</sup>:259)

丁度、1982年には河口域英語が注目されつつあり、RPには他にもコックニーの特徴が侵入していた頃である。そして、Cruttenden (2000:80) では、20年を経て、/l/の母音化がRPの特徴として認められ、RP話者が、例えばheld/heʊd/やball/bɔːl/というコックニー由来の発音をしても、そのことに他のRPの話者は気付かないだろうと述べている。

そして、Przedlacka (2001:40) は、RPにおける/l/の母音化について、インフォーマント——RP話者の13歳の少年2名、RP話者のイートン大学の学生数人、RP話者の教師1名、U-RP話者1名、mainstream RP話者1名——に対し、発音のチェックを行っている。そして、語頭にこない/l/を母音化する確率は、/l/の例全体の3分の1 (34%) だったと報告している。ただし、/l/の母音化の特異な点として、母音化する確率が、人によって、大きく異なることが挙げられている。例えば、ある1人のU-RP話者が33例のうち7例 (21%) を母音化したのに対し、もう1人のmainstream RP話者は32例のうち16例 (50%) を母音化している。彼らは、基本的に、それぞれU-RP話者とmainstream RP話者で、どちらもコックニー由来の/l/の母音化という特徴を持っているようであるが、その出方には強弱があるのである。

Cruttenden (2000:80) は、RPはそれぞれ特徴の束であり、その束は個人によって異なることを述べている。仮に、RP、Refined RP、Regional RPsというCruttenden (2000) が提案する3タイプが存在するとしても、これらの間に明確な境界線は無いのだ。それゆえ、ある人は、基本的にはRPだけれど、ある重要なRefined RPの特徴を持っている、ということも有り得る。そして、/l/の母音化に関する「3分の1」という数字は、RPの一般的な記述に/l/の母音化がほとんど無いことを考えると、とても大きく感じられるのである。

## 2.2. コックニーにおける/l/

コックニー (Cockney) は、容認度の低い変種の1つである。しかし、今でもコックニーは何百万人というロンドン市民に用いられ、ロンドンに行けば誰でも耳にする地域英語である。現在、コックニーにも、他の地域英語と同様、バラエティが認められる。第一に、「訛りの強いコックニー (deep Cockney)」、第二に、教育を受けた結果の「訛りの軽いコックニー (light Cockney)」の2つであり、これらのグループには容認度にも幅がみられる。

現在残っている初期コックニーの著作には、Henry Machyn (?1498~?1563) の日記があり、古くは15世紀頃より初期コックニーが始まっていることがわかる。また、チャールズ・ディケンズ (1812~70) やバーナード・ショー (1886~1950) も、それぞれ音声記号を用いずに当時のコックニーを表記している。ショーは劇作家であっただけではなくヨークシャー方言学会の会員であり、BBCの放送英語諮問委員会会員で、BBC英語の語彙・用法・発音の制定にも加わるほど、言語に強い興味と関心を持っていたようである。

コックニーでは、流音/l/は、音性環境によって明るい [l] か暗い [ɫ]、そして母音

[ʊ] のいずれかの音に変化する。次の例文 (4) はショーの『ピグマリオン』第一場の花売り娘イライザのセリフであり、(5) はこれを正しい綴りに書き直した。(4) では、Cockney の /l/ の軟口蓋化が、「視覚方言 (eye-dialect)」によって、以下の様に表現されている。

(4) Wal, fewd dan'y deooty bawmz a mather should, eed now bettern to spawl a pore gel's flahrzn than ran away athaht pyin.

(5) Well, if you 'd done your duty by him as a mother should, he'd better than to spoil a poor girl's flowers and then run away without paying. (Wright. 1981:19-20)

例文 (4) では、暗い[ɫ]を “-wl” や “-el” と綴り、軟口蓋化による暗い音色を表記したのである。

また同様に、ショーは、他の著作においても、Cockney の特徴である /l/ の母音化を、暗い[ɫ]と区別して “-u” と綴り字表記しているのである。

(6) We aw-u feu on the baw-u as it row-u-d daan the 'i-u.  
(We are fell on the ball as it rolled down the hill.)  
(Wright. 1981:134)

例文 (5) では、fe-u (fell)、baw-l (ball)、row-u-d (rolled)、' i-u (hill) と、語末の /l/ が母音化して、実際は後舌高母音の [ʊ] に聞こえることを、“-u” という綴り表記で表現している。

英語の変種に対する社会の寛容度が徐々に増大して、上流階級が下層階級の英語をこだわりなく——時には進んで——使う時代になってきたようである。Cockney の /l/ の母音化もその 1 つであり、Cruttenden (2000:80) によれば、これはももとは Cockney と他の地域英語の方言だったけれども、いまや完全に「RP の特徴」として認められるようになってしまったのである。

### 2.3. 他の変種における /l/

では、Cockney 以外のイギリス英語の変種は、どうであろうか。

イギリス英語の中で、RP と同じ音声環境に暗い[ɫ]が採用されるのは、イングランド南部型の英語である。イングランド南東部になると、Cockney の特徴と同じ /l/ の母音化が起こる。ただし、南東部の英語では、暗い[ɫ]が母音化して——[ʊ]ではなく——[o]となると説明されている。つまり、Bill は /bro/、field は /frod/ と聞こえ、またそのように発音するのである。

地方言語の中でも比較的容認度の高いアイルランド語とスコットランド語、そしてスコットランド英語やウェールズ英語、そしてイングランド北部の英語、これらにはどれも、

/l/の母音化は見られない。そもそも、アイルランド英語とウェールズ英語では、どのような音声環境にあっても常に明るい [l] が発音されるので、暗い [ɫ] は存在しないのである。ただし、意識してRPの発音に従っている場合や、標準的な話し方をする人々の英語には、当然、時に暗い[ɫ]が聞かれるようである。

スコットランド英語の場合は少し特別で、leap [tʰɪp]のように、語頭で暗い[ɫ]が用いられ、母音が後続する場合にはLulu[tʰɫu]やmeal[miɫ]のように、/l/の異音として歯音[ɫ]が特別に採用されるようである。

#### 2.4. RPにおける/l/：明るい[l]と暗い[ɫ]

2章で述べたように、「/l/の母音化」すなわち「暗い [ɫ] から[ɹ]への母音化」は、Wells (1982) の時代にはまだRPの特徴とは言えないのであるが、Cruttenden (2000) になると、既にRPの特徴として認められていると言っている。

ただし、2.1節で触れたように、標準的なイギリス英語では、/l/は、実際の発音では明るい[l]と暗い [ɫ] に相補分布する。そして母音化は、暗い[ɫ]として分布している/l/のうち、語尾と閉鎖音の前に現れる/l/に起こりやすい。

明るい[l]と暗い[ɫ]の共通点は、2.1節にあるように、どちらも舌先は歯茎の中央に接触させていること、相違点は、中舌と後舌の部分であるが、明るい[l]はそのまま下がり、一方、暗い[ɫ]は中舌で下がり後舌が軟口蓋に向かって上がる舌の構えを見せる<sup>18</sup>。

母音の前には明るい [l] が現れる。lead /li:d/のように前舌母音の前が最も明るく (light or clear) に聞こえ、luck /lʌk/のように中舌母音の前では中間の音色、look /lʊk/のように後舌母音の前では多少暗いとされる。これは、前舌母音が後続する場合、明るい [l] の構えは前舌母音の構えにもともと近く、発音時に同じ舌の構えのまま発音する為に、音が明るくなる。また、後舌母音が後続する場合、後舌の構えの準備をするため、[l]はあまり明るくない音色となる。そして、中舌母音が後続する場合には、その影響は丁度中程度となる。このように、/l/音は音声環境によって影響を受け、明るい[l]にも、暗い[ɫ]にも変わり、音色の明るさも相当変化するとされている。

D.Crystal. (2003:122) は、/l/が母音に後続する場合——例えばpull, alter, bottle——や子音の前に来る場合などに、暗い[ɫ]が出現すると述べている。たとえば、feel /fi:l/のように前に母音がくると、それが前舌母音であっても暗い[ɫ]が現れる。ところが、feeling /fi:liŋ/のように前舌母音に前後を挟まれると、/l/の発音時に前舌の構えのまま良いために明るい[l]になるまた、Honolulu /hənəlu:lʊ:/のように後舌母音に前後を挟まれると、/l/の発音時に後舌の構えを準備しなくてはならないため、逆に最も暗い[ɫ]が現れる。母音の後ではその母音に影響を受けずに暗い[ɫ]を発音できるが、後に母音が来ると、口腔内においてその構えを準備しなくてはならないため影響を受ける。したがって、基本的に母音の後には暗い[ɫ]が表れるが、後続の母音がある場合はその限りではなく、後続の母音のタイプによって、明るい暗い[ɫ]と明るい[l]が相補分布すると考えられる。また、後続に何も来ない語末、後続に子音がくる場合も、暗い[ɫ]が現れる。そして、暗い[ɫ]から[ɹ]への母音化も、時に起こるのである。

## 2.5. アメリカ英語における /l/

竹林滋, 齊藤弘子. (1998:113) では、「アメリカ英語では多くの話し手が全ての位置で多少とも暗い[ɹ]を用いる」と言い、松坂 (2000:114-117) は、「アメリカ英語では多くの人が暗い[ɹ]のみを使う」と言う。これらの説明は、違った意味で曖昧である。そして、米音には明るい [l] と暗い[ɹ]が存在するのかどうかともわからなくなる。また、/l/の母音化については、何も触れられていないので、一層わからない。また、他の多くの文法書においても、アメリカ英語における /l/の発音については、言及されていないか、これらと同様に曖昧な記述に終わっているかのどちらかである。

Prator and Robinett (1985) はGAに基づくアメリカ英語の発音教本であるが、明るい [l]と暗い[ɹ]という /l/の2つの異音に言及している。例えば、母音の前の l (lay) は、母音に後続する l (call) よりも広がり (extensive) を持つと述べている。「広がりを持つ」音とは明るい [l]の事を指す。語頭の /l/の場合、音が始まる時には既に歯茎に舌先が接触している。そのまま母音に移行しながら発音すると、明るい音になるのである。一方、母音の後ろの l (feel) は、暗い[ɹ]になると言う。なぜならば、この音が始まる時には、母音の構えが少し残ったままなので、歯茎に舌先が接触しておらず、そこから /l/を発音しようとするとき暗い[ɹ]になると言う。この研究によれば、GAにも明るい [l]と暗い[ɹ]が存在することになる。

Ladefoged (2001:55-66) では、ほとんどのイギリス英語は、明るい [l]と暗い[ɹ]の間にかかなりの大きな違いがみられるが、アメリカ英語ではその違いが小さいと述べている。さらに、ほとんどのアメリカ英語は、語頭や前後を前舌母音に挟まれている場合以外は、全ての /l/がいくらか軟口蓋化していると言う。そして、注目すべきなのは Ladefoged 自身の発音を内省しているところである。彼は「母音化 (vocalization)」という表現はしていないものの、自身の /l/の発音の際、母音化が起こることを認めているのである。彼は、自分が “feel” を発音する際、軟口蓋化によって舌全体が引き上げられて口の奥へ移動し、そのため舌先は上歯茎に接触していない、と説明しているのである。しかし、残念ながら、これが一般的な現象であるかどうかについては、何も述べられていない。

結局、イギリス英語ほど明らかでは無いにしても、Prator and Robinett (1985) で述べられているように、アメリカ英語にも明るい [l]と暗い[ɹ]は間違いなく存在するのである。ただし、アメリカ英語の場合は、明るい [l]でもいくらか軟口蓋化されて暗い音色が出ている場合が多いようであるし、そして暗い[ɹ]はさらに暗くなると言われているので、場所によっては確実に、暗い[ɹ]から[ʊ]への母音化がなされているだろう。以上のことは、Ladefoged (2001)の記述からも、ほぼ間違いが無いと思われる。

## 3. まとめ

流音 /l/は、日本人学習者にとって、発音と聴き取りの両面で難しい音である。基本的に母音の前に [l]、母音の後と語末、そして子音の前に [ɹ]が来るのであり、[ɹ]は軟口蓋化によって、後舌が少し軟口蓋の方に持ち上げられると説明されるものの、現在は聴覚的な印象によって「明るい」か「暗い」かという2種類に分けられている。しかし、実際は

個人差や音声的環境により、もっと細かい差がみられるものと思われる。

イギリス英語の /l/ については、比較的、どの文法書にも詳しく記述されている。イギリスでは、もともと /l/ という1つの音素に対し、明るい [l] と暗い [ɫ] という明らかに違う2つの異音が対応していたため、音声学者が /l/ の変容に早くから注目したのであろう。そして、イギリスの /l/ の母音化については、2.1 節で説明したように、19世紀のコックニーが起源とされており、今では充分に RP の特徴の1つとなったと言える。

アメリカ英語の /l/ については、何も触れていない文法書が多い。たとえ言及していても、「常に暗い [ɫ] を用いる」や「多少とも暗い [ɫ] を用いる」などの、曖昧で正確とは言えない記述のものである。アメリカ英語において、明るい [l] と暗い [ɫ] の違いはイギリス英語ほどはっきりしていないが、Prator and Robinett (1985) や Ladefoged (2001) の言うように、例えば母音の前と後といった音声環境の違う場所では、異なる音になっているはずである。すなわち、母音の前の /l/ は明るい [l] と暗い [ɫ] の間の音に、母音の後の /l/ は暗い [ɫ] から母音 [ʊ] の間の音か、あるいは母音化されて [ʊ] の音になるかのどちらになっているのではないだろうか。

アメリカ英語の /l/ の母音化については、管見の限り、Ladefoged (2001) 以外に言及している文法書は存在しなかった。基本的に英語音声学の本には、イギリス発音については詳しいが、アメリカ発音については簡単にしか触れていないものが多い。/l/ の母音化については、ほとんど言及していないのである。

これには、次の2つの可能性が考えられる。第一に、アメリカ英語の /l/ の母音化が極く新しい現象であるという可能性、第二に、/l/ の母音化は以前から存在していたがアメリカ英語では特に意識されて来なかったという可能性である。Ladefoged (2001) の興味深い内省と、アメリカ英語の暗い [ɫ] が母音 [ʊ] に聞こえることが多いという経験から、筆者は後者の可能性を考えている。

清水克正 (1995:38) は、「現実の言語使用において /l/ は [ʊ] に変化する事が知られており、これらの音には類似性がある」と結論付けている。そして、film /fɪlm/ → /fɪrɒm/, milk /mɪlk/ → /mɪrɒk/ などの例を示している。暗い [ɫ] と後舌母音 [ʊ] は、どちらも後舌の位置が高く、軟口蓋に近づけて構えるという共通点がある。そして、舌の微妙な移動によって、[l] → [ɫ] → [ʊ] と実際の音が変化する。[l] → [ɫ] → [ʊ] へと、後舌の位置はだんだん高く、ますます軟口蓋化していく。舌先も、[l] → [ɫ] の段階では上歯茎に接触しているが、だんだん奥へと引いていくので、最終的に [ʊ] の段階では、舌先は上歯茎から離れてしまい、母音化するのである。

タイトルにあるように、イギリス英語における暗い [ɫ] から [ʊ] への母音化は、歴史的な証拠から、コックニーから影響を受けて RP が変容したことは間違い無い。しかし、アメリカ英語におけるそれに関しては、まだ調査も十分にされておらず、今もはっきりしたことが言えない段階である。ただし、イギリス英語だけではなくアメリカ英語にも明るい [l] と暗い [ɫ] の両方が存在するという事実、そして暗い [ɫ] から [ʊ] への母音化も存在することは確かだと解釈しておいて良さそうである。

- \* 本稿は映画英語教育学会関西支部第3回大会（2005年9月18日、於：京都女子大学）において口頭発表した内容を大幅に加筆し発展させたものである。
- <sup>1</sup> “Received Pronunciation” を通例RPと略す。イギリス上流社会に受け入れられた代表的な発音。容認発音。
  - <sup>2</sup> インドなど公用語として英語が採用されている国々で用いられている英語
  - <sup>3</sup> 母語でも公用語でもなく学習して身につけられた英語
  - <sup>4</sup> McCrum, R, MacNeil, R. and Cram, W. (2003:32)を参照。
  - <sup>5</sup> 一般にロンドンはイーストエンドに住む下層階級の人々の話し言葉を指す。
  - <sup>6</sup> Prator and Robinett. (1985:115)を参照。
  - <sup>7</sup> 連邦公用語はヒンディー語、連邦補助公用語が英語で、他に17の地方公用語がある。
  - <sup>8</sup> 公用語はスワヒリ語と英語である。
  - <sup>9</sup> 一般には、無標のRP (Unmarked RP) と、エリート階級が用いる有標のRP (Marked RP) に二分されることが多い。しかし、研究者によって、それぞれ分け方が異なる。
  - <sup>10</sup> 『マイ・フェア・レディ (My Fair Lady)』(1964) は、ジョージ・キューカー監督 (Cukor, George) の作品で、舞台はロンドンである。街角で花売りをしていた娘イライザが、音声学教授ヒギンズに出会い、完璧な英語とマナーを仕込まれて、大使館の舞踏会に出席するという物語である。原案は、バーナード・ショー (George Bernard Shaw) の『ピグマリオン (Pygmalion)』(1956)。
  - <sup>11</sup> McCrum, R, MacNeil, R. and Cram, W. (1987:22)を参照。
  - <sup>12</sup> 東部と中西部全域の方言はMidlandとも呼ばれる。
  - <sup>13</sup> McCrum, R, MacNeil, R. and Cram, W. (1987:2)を参照。
  - <sup>14</sup> 安井(1989:257)を参照。
  - <sup>15</sup> McCrum, R, MacNeil, R. and Cram, W. (1987:34-6)を参照。
  - <sup>16</sup> 1943年生まれ。
  - <sup>17</sup> 音素は/ /で表記し、実際の音声として現れる異音は [ ] で表わす。
  - <sup>18</sup> このまま舌先が歯茎から離れ、多少そり返って、硬口蓋の方に近づくと /ɪ/ や /ə/ の音に近くなる。

#### <引用文献>

- 荒木一雄(編). 1999. 『英語学用語辞典』東京：三省堂。
- Cruttenden, Allan (ed.) 1994. *A Gimson's Pronunciation of English, 5th ed.*, London: Arnold.
- . 2000. *A Gimson's Pronunciation of English, 6th ed.*, London: Arnold.
- Crystal, David. 1987. *The Cambridge Encyclopedia of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1997. *English as a Global Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Green, Jonathan. 1985. *Newspeak: a dictionary of jargon*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Green, L.J. 2002. *African American English: A Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gimson, A.C. 1980. *An Introduction to the Pronunciation of English*. 3<sup>rd</sup>. London: Edward Arnold.
- Hill, C. P. and J. C. Wright. 1981. *British History 1815-1914*. Oxford: Oxford University Press.
- Huang, R. 1983 (1965) *English Pronunciation Explained with Diagrams*. Hong Kong: Hong Kong University press.
- Hughes, A and Trudgill, P. 1979. *English Accents and Dialects*. Edward Arnold. (鳥居次好, 渡辺時夫(訳)『イギリス英語のアクセントと方言』研究社出版.)
- Jones, D. 1909. *The Pronunciation of English*, 1th. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1956. *The Pronunciation of English*, 4th. Cambridge : Cambridge University Press.

- 小泉保. 2002. 『改訂 音声学入門』 東京: 大学書林.
- Ladefoged, P. 2001. *A Course in Phonetics*. 4<sup>th</sup>. Florida: Harcourt College Publishers.
- . 2002(2001) *Vowels and Consonants—An Introduction to the sound of languages*. Massachusetts and Oxford: Blackwell Publishers.
- 松坂ヒロシ. 2000 (1986) 『英語音声学入門』 東京: 研究社出版.
- McCrum, R, MacNeil, R. and Cram, W. 2003 (1987) *The Story of English*, 3rd revised Edition. New York and London: Penguin Books.
- 中尾俊夫. 1999 (1989) 『英語の歴史』 東京: 講談社現代新書.
- 中尾俊夫, 寺島勉子. 2002 (1988) 『図説英語史入門』 東京: 大修館書店.
- Prator, C. and Robinett, B. 1985. *Manual of American English Pronunciation*. 4<sup>th</sup> Edition. New York: CBS College Publishing.
- Przedlacka Joanna. 2001. “Estuary English and RP: Some Recent Findings.” in *Studia Anglica Posnaniensia* 36, pp.35-50.
- Quirk, R. and S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik, 1985. *Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Shaw, G. B. 1980. “Pygmalion.” pp.1-89. in *Pygmalion by George Bernard Shaw and My Fair Lady adaptation and Lyrics by Alan Jay Lerner*. Written by Shaw, George Bernard and Lerner, Alan Jay. New York: Signet Classic.
- 清水克正. 1995. 『英語音声学 理論と学習』 東京: 勁草書房.
- 竹林滋. 1993 (1982) 『英語音声学入門』 東京: 大修館書店.
- 竹林滋, 齊藤弘子. 1998. 『改訂新版 英語音声学入門』 東京: 大修館書店.
- 田中美和子. 2005. 「音声学資料としての映画—『マイ・フェア・レディ』(1964) にみるコックニー—」 『国際研究論叢』 第19巻第1号, pp.39-53.
- Trudgill, P. 1974. “Standard and non-standard dialects of English in the United Kingdom: problems and politics,” in *International Journal of the Sociology of Language*.
- . 1983. *On dialect: Social and Geographical Perspectives*. Oxford: Blackwell.
- . 1992(1990) *The Dialects of England*. Oxford and Cambridge: Blackwell.
- Wells, J. C. 1982<sup>a</sup>. *Accents of English I. An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1982<sup>b</sup>. *Accents of English II. The British Isles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1982<sup>c</sup>. *Accents of English III. Beyond the British Isles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wright, P. 1981. *Cockney Dialect and Slang*. London: B.T. Batsford Ltd. (「コックニーの英語」 松村好浩 (編訳) .1983. 『世界の英語 I イギリス諸島編』 研究社, pp.68-136.)
- 安井稔. 1989(1987). 『英語学概論』 東京: 開拓社.